

1950年代中国におけるモンゴル語の借用語問題

テグス

はじめに

建国初期中国の諸少数民族は“社会主義”“総路線”などの新しい概念をいかにして自民族語に取り込むかについて様々な工夫をこらした。“掘”“創”“借”などのことばはまさに当時の諸少数民族の造語の工夫をこめて登場した。これらのことばが意味するところは、新しい概念を昔から使われてきた語彙を“掘り起こして”当てること、あるいは新しい語彙に“創りかえる”こと、他言語から“借り入れて”表すことであった。いずれも、民族語の使用を前提としているが、しかし中国という国家的枠組の中で考えれば、中国語からの語彙の借用は避けられない。

ところが、国外に同族を持つ民族の場合はその同族語から語彙を取り入れることも可能であったため、必ずしも中国語から借用する必要はなかった。つまり、こうした国外に同族を持つ民族の借用語の問題は民族語かそれとも中国語かという二者択一の可能性を持っており、ひいてそれは民族のあり方と国民統合をめぐる極めて政治的な問題を根底においている。

本稿では、1950年代中国におけるモンゴル語の借用語問題への考察を通して、1950年代中国の諸少数民族、とりわけ国境に跨る諸民族の国家統合と民族のあり方をめぐって揺れ動く様子をとらえたいと考えている。

中国領内のモンゴル語の近代語彙に関する研究としてフフバートルの研究は最も詳しい^①。フフバートルは当時発行されたモンゴル語定期刊行物の中で登場する語彙を丹念に調べ、それらの語彙を分析することでモンゴル語近代語彙の形成過程を明らかにして

いる。フフバートルの研究は1950年代以前の時期に限定されているが、1950年代以降のモンゴル語の語彙研究においても土台となる研究である。

1950年代以前のモンゴル語の語彙形成に関する研究に比べ、1950年代以降の研究は今日の中国政治と深くかかわっているため、非常に慎重かつ浅薄に行われているという印象をあたえる。たとえば、1950年代のモンゴル語の借用語問題に直接携わったチンゲルタイはその回顧文⁽²⁾の中で、当時モンゴル語の新聞、雑誌に数多く登場したロシア語からの借用語に注目し、「人々から離れ、内モンゴルの実際の状況から離脱している」として、モンゴル語の借用語問題を否定的にとらえている。このようなモンゴル語の借用語問題の本質——それは中国語の語彙の排除、または内外モンゴルの言語的統一の試み——を抜きにした研究の背後には中国政治への配慮がある。

その他、「文化大革命」が終結した直後、中央政府の反省の声に呼応する形で1950年代のモンゴル語の借用語について幾つかの研究が出されたものの、いずれも詳細な記述を避けている。

1950年代中国におけるモンゴル語の借用語問題を取り上げることの意味はまず、こうした研究の空白を埋めるという点にあり、次に、1950年代中国の国民統合と民族のあり方をめぐる政治的狀況を理解する上で示唆をあたえると思われる。

本稿は、1950年代に発行されたモンゴル語定期刊行物、辞典などを中心に分析を行なった。

最後に、本稿で扱う借用語の概念について若干の説明を加えたい。借用語の借用方式としては一般的に①他言語の音・形態をそのまま自民族語で表わす音訳借用語②他言語の意味を自民族語で表わす翻訳借用語③他言語と自民族語の組み合わせによる混種語の三つに分類される。本稿で取り上げる借用語の例はいずれもこの三つの分類を含むものである。

1 漢語、日本語の語彙の浸透

20世紀半ばまでの内モンゴルは政治的に中国と日本の支配を受けていたため、モンゴル語近代語彙の形成において漢語と日本語があたえた影響も絶対的なものであった。

1942年、日本人言語学者服部四郎はモンゴル語の調査のため内モンゴルを訪れた。服部は調査によって、モンゴル語の中に大量に入り込んだ漢語の語彙を発見し、大いに嘆い

ている⁽³⁾。日本語を「大東亜共栄圏諸民族の共通語」と考えていた服部にとっては、少し手遅れの感もあったかもしれないが、ある面において彼の調査結果は当時のモンゴル語がおかれていた状況を表している。

ところで、モンゴル学者ハイシツヒによる記述も見逃すべきではない。ハイシツヒは『モンゴルの歴史と文化』の中で「モンゴルにおける日本の文化政策は1938年以來、モンゴル人をますます失望させる一方だった。この年から、ほとんどすべての日本の役所は日本語を第二の言語として普及しようと努めた。満州国では1944年に、蒙疆連合ではすでに1943年に五千語にのぼる日本語の語彙をモンゴル語の中に混ぜ込む作業に着手した。近代的な特に技術用語の造語は日本語にもとづいて行うことが課題となった」⁽⁴⁾と、日本語のモンゴル語に与えた影響を述べている。

こうしたモンゴル語に浸透した漢語と日本語の語彙が当時発行されていたモンゴル語定期刊行物の中で顕著に現れている⁽⁵⁾。

1947年5月、内モンゴルの革命家たちの内外モンゴル統一の試みが失敗に終わり、内モンゴルは内モンゴル自治政府として中国共産党の支配下に置かれた。この時、日本はすでに中国大陆から撤退し、モンゴル語に対する日本語の影響はもはや不可能となり、漢語の影響だけが予想された。ところが、内外モンゴルは「社会主義大家庭」の中でその交流が許され、モンゴル人民共和国のモンゴル語の語彙も徐々に内モンゴルのモンゴル語の中に登場し始めた。

なお、1945年の時点でモンゴル人民共和国はすでに伝統的モンゴル文字を廃止し、キリル文字を使用していたため、伝統的モンゴル文字を使用していた内モンゴルとの間で文化的交流において依然として障害があり、それがモンゴル人民共和国の語彙の内モンゴルへの導入にも一定の影響を与えていた。

そうした中、1950年代半ばから内モンゴルではモンゴル人民共和国との文字統一を目的にモンゴル語のキリル文字化運動が展開され、内モンゴルがモンゴル人民共和国から語彙を取り入れることに拍車をかけた。

2 中国語の語彙の排除とモンゴル人民共和国からの語彙の取り入れ

中国政府は建国直前の1949年9月29日に『中国人民協商会議共同綱領』⁽⁶⁾を公布し、その中で「中華人民共和国領内のすべての民族は平等であり、(……)その言語文字を発展

させ、改革する自由を有する」と述べた。

こうした中央政府の民族政策とは裏腹にモンゴル人幹部の中ではモンゴル語に対する中国語の同化を懸念し、モンゴル語の維持と使用に対する強い危機感を覚える人々が現れた。このような事態を重く受け止め、内モンゴル自治区政府は1953年5月にフフホトで「第一次モンゴル語文工作会議」を開き、会上ではそうした幹部への批判を加えるとともに、モンゴル語の発展にかかわる具体的な方案を示した。

会議ではモンゴル語の造語についての話し合いも行われ、その話内容をまとめてチンゲルタイは次のような内容の報告^⑦を出している。「報告」ではモンゴル語の造語に関して二つの側面が述べられている。一つは、新しい概念をモンゴル語の中で工夫して作ること。これはいわゆる“掘”“創”に当たる内容であり、最も強調されている部分でもある。そして、もう一つは“掘”“創”によって新しい概念を表わせない場合の他言語からの“借”である。以下はその借用する場合の規定である。

- ①モンゴル語の構造を破ってはいけない。モンゴル語文法に適応させる。
- ②過去において吸収した中国語の語彙のうち群衆の中で定着し、モンゴル語文法に適したものを採り出し、そのモンゴル語表記を決める。
- ③比較的難しい学術用語、専門用語をモンゴル語で表しにくい場合、ロシア語から借用する。
- ④人名、地名など固有名詞に関してはアジア諸国、特に漢字を使用する国の人名、地名及び国内諸民族の人名、地名は内モンゴルの実際の状況と可能性から考えて、基本的に中国語の呼び方に従う。その中で、合成された人名、地名はその音に従って表記する。その他の世界各国の人名、地名はロシア語の呼び方に基づいて表記する。

「報告」では要するに、新しい概念はなるべくモンゴル語の中で工夫して作ることが推進されており、やむをえず借用する場合でも漢字使用圏の人名、地名を除いてロシア語から借用することが望ましいとしている。モンゴル語が半世紀にわたって中国語から語彙の借用を行わざるを得なかったうえ、さらに今後も中国語の影響が予想される状態の中で、こうした中国語からの借用を牽制することはモンゴル語の語彙形成史における一つの転換点とも言える。

1954年7月、内モンゴル自治区ではモンゴル語文工作機関「モンゴル語文研究会」が発

足され、内モンゴル自治区副主席のハフンガが自ら主任を務めた。ハフンガはまたその翌年に発足される「文字改革委員会」においても主任を兼任しており、1950年代のモンゴル語文工作はほとんど彼の指導下で行なわれていた。ハフンガは1940年代、内外モンゴルの統一または内モンゴルの独立のため東部地域で活動した革命グループのリーダーである。彼は内モンゴルの中国からの分離独立を強く望んでいたが、ソ連とモンゴル人民共和国の協力を得ることができず、のちの内モンゴル自治区主席となるウランフの説得に応じて、中国共産党側についたのである。モンゴル語の指導権を彼が握っていたことは1950年代のモンゴル語の動きを見る上で最も重要な点である。

1955年7月12日、内モンゴル自治区人民委員会によって「キリル文字を普及させる件に関する決議」が出された。この決議は1954年5月の「政務院第二一七次政務会議」で出された「一部の民族はソ連とモンゴル人民共和国に隣接しているため自らキリル文字を使用してもよい」⁽⁸⁾という決定に従ったことは明らかだが、内モンゴルにおけるキリル文字の学習は中国建国以前の段階ですでに始まっており、それもモンゴル人民共和国のキリル文字化の影響によるものであった。つまり、モンゴル語のキリル文字化は中国の民族政策のもとで、内モンゴルの文字を「モンゴル人民共和国のキリル文字と同一化し、内外モンゴルの文化的交流を順調に行う」⁽⁹⁾のために事前に進められてきたのである。

「決議」を待たずに、内モンゴルの語文工作者たちの間ではモンゴル語がキリル文字で表記された場合の基礎方言の設定と借用語に関する論争がすでに口火を切っていた。

基礎方言の設定に関しては主に二つの考えに分かれていた。一つは内モンゴルの中で一つの方言を選出して、それに基づいて新しい文章語を作成しようとの考えで、もう一つはモンゴル人民共和国のハルハ方言に基づいた文章語をそのまま内モンゴルに導入しようという考えであった。この二つの考え方を持つ人々が対立し、両者の間で激しい議論が繰り広げられた。数度にわたる討論会での議論と内モンゴル自治区党委員会の調整を経て、モンゴル人民共和国のハルハ方言を基にした文章語をそのまま内モンゴルに導入するという見方が有利となった。

そもそも、基礎方言の設定は借用語に直接関係する。もし、モンゴル人民共和国の文章語をそのまま内モンゴルに導入することになれば、内モンゴルでは“掘”“創”の必要もなくなり、その代わりモンゴル人民共和国で借用されたロシア語の語彙、またはハルハ方言に基づいて創られた語彙を覚えればよいのである。

実際、1954年には内モンゴルでそうした“掘”“創”より“借”を重視する傾向がすでに見

られている。たとえば、「客観」と「主観」という二つの概念について、「bosodči」[beiçi]とモンゴル語で表すよりモンゴル人民共和国で使われている「объект」「субъект」というロシア語の語彙を使用したほうがことば本来の意味を正確に伝えられるとしている。また、「ナショナリズム」を意味する中国語の「国家主義」をそのまま“ulus-un ujil”というふうに意識するのは誤りであると指摘し、“undustn-u ujil”(民族主義)というふうに翻訳すべきであるとしている⁽¹⁰⁾。

このようなモンゴル人民共和国からの語彙の取り入れを重視する傾向が明確に示されたのは1956年6月にフフホトで開かれた「モンゴル語族学術討論会」の時であった。会上では「モンゴル語文研究会」常務委員のアスラトは「内モンゴルの翻訳工作の九年、新しい語彙の発展状況、今後の工作に関する意見」という報告を行い、その中で借用語に関して次のように述べている。

①モンゴル語の発展法則を破ってはいけない。

②モンゴル語にはもともと存在せず、モンゴル語で表現しにくい場合借用語を用いる。

専門用語、国際的に共通する術語はモンゴル語で表わしにできれば、ロシア語から取り入れる。

③使用しやすい、またはそうするしかなく、音にしたがって翻訳するとき、その他の語彙と混同しない漢語の語彙は借用してもいい。漢語に使われている国際的な術語は本来の音に従う。

④世界各国の人名、地名は主にロシア語の音に従い、漢語の音に基づく場合にはモンゴル語書写法に合せる。各国に翻訳され、使用されている地名もモンゴル語で翻訳して使う。モンゴル人民共和国の新しい語彙を過去において広範囲にわたって取り入れてきた。今後もっと取り入れ、その経験と成果を学ぶべきである。モンゴル人民共和国との文化的交流は日々増し、我々の今後の発展につれ、語彙を統一させる任務がさしあたっている。だから、モンゴル語の語彙の統一組織と常に連絡をとり、新しい語彙の発展をできるだけ統一させることを望む⁽¹¹⁾。

1953年の「第一次モンゴル語文工作会議」の時に示された借用語に関する報告の内容と違って、この報告では単に中国語の語彙の浸透を牽制するだけではなくモンゴル人民共和国との語彙の統一がさし当たった任務として提示されている。

このような中国語の語彙の浸透を牽制するような動きは同時期に諸少数民族の中で一斉に起こっていた。朝鮮族が展開した「朝鮮語純化運動」⁽¹²⁾、新疆ウイグル自治区の諸民族の文字改革、制定運動などはいずれも中国語の同化に反対することを根底においている。

3 中国語からの強制的借用

こうした諸少数民族の中で起こっていた中国語排除と国外同族との言語的連繫を重視する動きに歯止めをかけるために中央政府は1958年3月27日北京で「第二次少数民族語文科学討論会」を開き、そこで少数民族語に従事する「地方民族主義」的考えを持つ人々を厳しく批判した。

「地方民族主義」はそもそも少数民族の中で生じた「中国からの分離独立、自治地方の行政範囲と権限の拡大、漢族幹部の排斥」などなどの多岐にわたる動きを総体的にとらえた概念であり、いわゆる少数民族に携わる人々はすべてそのレッテルを貼られる可能性があるということである。

「第二次少数民族語文科学討論会」では民族語の「純粹さ」を保つために漢語からの語彙の借入れを拒むことに対しても厳しく批判した。例としてモンゴル人がもともと漢語の「將軍」という単語を直接音訳して使うことに慣れているにも関わらずモンゴル語文工作者たちはそれを無視して、ロシア語の「генерал」を借用して使ったことをあげている⁽¹³⁾。

この会議上で中国社会学院少数民族言語研究所副所長の傅懋勳は「国内少数民族言語の新術語の問題について再論する」という報告を行い、今後の諸少数民族の造語について具体的な方針を提示した。

- ①各兄弟民族は新しい術語を制定する際、特に社会、政治、科学技術用語は中国語から借用すべきである。国際的術語も原則上中国語を通じて吸収すべきである。
- ②ラテン文字を使用する民族はその書写法をなるべく「漢語拼音方案」と一致させるべきである。もし中国語と系統的にあまりにも違っていて、特殊なケースに属する場合、今現在においては漢語拼音方案の書写法に完全に適応しなくてもよい。だが困難を克服し、大部分が一致するように努め、克服できなかった部分は暫時に自民族の書写法に従い、逐次に「漢語拼音方案」の書写法に一致させるようにしなくてはならない。後者に

関しては書写法の一致を求めるが読み方の一致はいまのところ強制しない。

- ③一つの民族が幾つかの文字を制定する、あるいは幾つかの民族が「文字聯盟」を実行するとき、いっそう中国語から借用すべきであり、借用する際の書写法も「漢語拼音方案」に近づけるようにする。わが国の兄弟民族が国外の民族と同じことばを用いる場合、借用語の面でその一致を求める必要はなく、中国語に近寄る路線を堅持すべきである。
- ④中国語からの借用は基本的に自民族の文法的規則に従って行われる。語順と語彙の構成において中国語と異なる言語では、もし群衆がすでにその借用された中国語からの語彙順になじんでいれば、群衆の習慣に従う⁽⁴⁾。

諸少数民族語の借用語は中国語の表記はもちろん、国際的に使われている術語も中国語の表記に従わせるというのである。そもそも、漢字は表音文字ではなく、音節文字である。そのため他言語からの完全な音訳は不可能に近く、中国ではそうした漢字の欠点を克服するためにその音に近い漢字を使用しつつも一定の意味を与えて借用するように工夫されている。たとえば、よく使われる例としては“coca-cola”を“可口可樂”と書く例がある。この種の例を諸少数民族語に書き写す時に“ke kou ke le”というふうに書いてもそれほど問題は起こらないが、もし“日本”を“nihon”あるいは“nippon”と書くのではなく中国語の音に従って“ri ben”と書くとはそれはもとの音と全く違ったものになってしまうのである。

また、国外に同族語を持つ民族に対してはその同族語からの借用を禁止し、中国語からの借用に限定している。こうした諸少数民族語に対する中国語からの強制的借用によって、その後、諸少数民族語の中に大量の中国語の語彙が入り込むことになるのである。

「地方民族主義」批判が高まる中、1958年3月19日、内モンゴル人民委員会は「キリル文字の普及を停止し、モンゴル文字を継続して使用する決議」を公布し、中国におけるモンゴル語のキリル文字化運動は挫折する。内モンゴルのモンゴル人たちが見た内外モンゴルの言語的統一の夢が打ち破られる瞬間であった。

モンゴル語のキリル文字化運動の挫折はモンゴル人たちに国民統合の中で民族語の自由を唱えることの難しさを改めて認識させた。

1959年1月、フフホトで「第二次モンゴル語文工作会議」が開かれ、それまでのモンゴル語に関する方針を改め、モンゴル語の造語に関しても次のように規定した。

- ①社会の発展に伴い新しく出現した術語に関しては、もしモンゴル語で表せる場合は、その語彙創製の伝統と法則に従い、群衆が理解し、使用できるようにモンゴル語で創製する。
- ②もしモンゴル語には適切な語彙が見当たらなければ、祖国の諸民族人民の共同語である中国語から借用すべきである。必要に応じてその他の民族語または国際的に使用されている言語から借用することも可能である。
- ③中国語から借用する場合はなるべく諸民族に共通する音韻に従って表記すべきである。ただし、早い時期に借用した語彙はこれに従わずにもとからの習慣に従って表記することもできる。借用語はモンゴル語の文法的法則に従わせる。
- ④上述した規定に基づいて統一されていない術語を統一させる。
- ⑤モンゴル語の新しい語彙の創製及び統一の仕事はモンゴル語文工作委員会に委ねて実行させる。本委員会は上述した原則の内容に基づいて具体的実施方法を決め、徹底させる⁽¹⁵⁾。

この「規定」ではそれまでに唱えてきたモンゴル人民共和国からの語彙の借用という項目はあとかたもなく消え去り、中国語からの一方的な借用が強調されているだけである。

1950年代後半の「地方民族主義」批判の中でモンゴル人民共和国からの語彙の導入を主張したアスラトは糾弾され⁽¹⁶⁾、それに続く「文化大革命」の時には1950年代のモンゴル語の指導権を握っていたハフンガをはじめ、大勢のモンゴル語文工作者たちは内外モンゴルの言語的統一を図ったとして命を奪われ、あるいは投獄されたのである。

4 二つの辞典からみるモンゴル語の借用語問題

1950年代以降のモンゴル語の借用語問題を見る上で次の二つの辞典は最も貴重である。

一つは1955年に「モンゴル語文研究会」から出版された『漢蒙簡略辞典』であり、もう一つは1975年に内モンゴル教育出版社から出版された『蒙漢詞典』である。

『漢蒙簡略辞典』は漢-蒙、蒙-漢という二つの部分から構成され、掲載されているモンゴル語の語彙はほとんど当時のモンゴル語による出版物に登場した語彙をかき集めたものであり、その数は16,000個にのぼる。『漢蒙簡略辞典』は1950年代中国で出された数

少ないモンゴル語辞典の一つである。

一方の『蒙漢詞典』(1975年)は単語登録数 40,000 個あまりで、単語の数においては『漢蒙簡略辞典』(1955年)を遥かに上回る。そして、『蒙漢詞典』は「文化大革命」の直後に出版されている。つまり、1950 年代後半から始まったモンゴル語に対する中国語からの強制的借用は「文化大革命」の中で一層の激しさを増したことを考えると 1950 年代後半以降のモンゴル語の語彙構成を見る上で最も適した辞典の一つである。

要するに、この二つの辞典を比較する目的は、1950 年代後半までにモンゴル人民共和国から借用された語彙(ロシア語の語彙を含む)がその後どれだけ中国語からの借用語によって置き換えられたのかという事実を突き止めるためである。

まず、『漢蒙簡略辞典』(1955)を見ると、a の音から an の音までの間に登場する語彙数は合計 42 個。その中でロシア語からの借用語は 26 個であり、全体の 62% を占めている。辞典の全体的内容からしてこの部分は最も顕著な例ではあることは確かだが、しかし当時のモンゴル語の中に登場した膨大な量のロシア語からの借用語を見る上でその価値を損なうものではない。そして、これらの内モンゴルに借用されたロシア語からの語彙数はモンゴル人民共和国のそれを上回っている。いずれにしても、内モンゴルの知識人たちの目にはロシア語からの語彙の導入は内外モンゴルの言語的統一を果たす上での一つの合流点として映っていたに違いない。

次に『蒙漢詞典』(1975)を見てみると『漢蒙簡略辞典』(1955)の a の音から an の音までの間に登場する 26 個のロシア語からの借用語は一つも見当たらない。つまり、これらの語彙は少なくとも 1976 年の時点では悉く排除されてしまっている。そして排除されたのはロシア語からの借用語ばかりではなかった。本来のモンゴル語の語彙も中国語によって置き換えられている。

たとえば、“думдаду улус(中国)” “сб хату нам(共産党)” などのモンゴル語の語彙が排除され、中国語の “жун гуэ” “гун чан дан” がそのまま音訳された形で表記されている。こうした語彙の置き換えはこの二つの辞典の比較の中でいたるところに見られる。

終わりに

1990 年代に入ってから中国とモンゴル国の国交正常化により、30 年にわたって閉ざされた内外モンゴルのモンゴル人たちの交流も再開されることになった。モンゴル国の

カセットテープ、書物などが中国領内のモンゴル地域に流入し、中国領内のモンゴル文化に一定の潤いをあたえた。まるで1950年代初期の内外モンゴルの交流の様子を思い浮かばせるようなムードであった。

そうした文化的交流を受け、中国領内のモンゴル人の間では、モンゴル国からの借用語を中国領内のモンゴル語に取り入れようとする議論も少しずつあらわれてきている。このようなモンゴル国からの語彙の取り入れの主張には中国語からの語彙を排除することと、内外モンゴルの言語の統一という政治的問題が孕まれており、その実現に難点も多々ある。いずれにしても、中国領内のモンゴル語が置かれている今日の状況——それはモンゴル語使用者数の日々減少——を考えれば、モンゴル国との文化的交流は大変重要であることにはかわりはなく、それゆえ、モンゴル国と言語的にも近寄る必要がある。

註

- (1) フフバートル『漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙の形成：中国領内のモンゴル語定期刊行物発達史に沿って』一橋大学博士論文、1998年。
- (2) チンゲルタイ「新しい語彙と術語問題について」、『語言文字論集』内蒙古大学出版社、1997年。
- (3) 服部四郎『蒙古とその言語』湯川弘文社、1942年、241-245頁。
- (4) ハイシヒ著、田中克彦訳『モンゴルの歴史と文化』岩波書店、2000年、332頁。
- (5) フフバートル、前掲論文。
- (6) 『中国人民政治協商会議』は最高権力機関としての全国人民代表大会に代わる臨時機関であり、『共同綱領』は憲法の役割を担っている。
- (7) 清格樂泰「モンゴル語文工作中に存在する幾つかの問題について」、『民族語文政策に関する文献資料』、『モンゴル語文』編集部、バヤンノール盟モンゴル語文委員会、1980年、87-105頁。
- (8) 国家民委文化宣伝司編『民族語文政策法規』民族出版社、2006年、31頁。
- (9) 「キリル文字を普及させる件に関する決議」、モンゴル語文研究会編『モンゴル語文』1955年10月第6期。
- (10) ナ・リンチン「術語、概念などを的確に翻訳するために」、モンゴル語文研究会編『モンゴル語文』、1954年7月創刊号、18-25頁。
- (11) モンゴル語文研究会『モンゴル語文』1956年4期、73-90頁。
- (12) 権寧俊「中国朝鮮族の「朝鮮語純化運動」と漢語——一九五七年の『延辺日報』紙面上の「朝鮮語

純潔化討論」を中心に」、『一橋論叢』2002年3月号、495-511頁。

- (13) 常紘恩「私が少数民族語文科学討論会に参加して感じた幾つかの点」、『中国語文』1958年5月、226-230頁。
- (14) 傅懋勳「再論国内少数民族言語の中の新術語の問題」、『中国語文』1958年6月、251-254頁。
- (15) 「モンゴル語の新しい術語制定と統一に関する内モンゴル自治区人民委員会の決定」、『民族語文政策に関する文献資料』、『モンゴル語文』編集部、バヤンノール盟モンゴル語文委員会、1980年、475-477頁。
- (16) ボルジギン・リンテン「反右派闘争におけるモンゴル人「民族右派分子」批判」、『アジア経済』2007年8月、2-23頁。

参考文献

モンゴル語文研究会編『漢蒙簡略辞典』内モンゴル人民出版社、1955年

『蒙漢辞典』内モンゴル教育出版社、1975年

内モンゴル自治区モンゴル語術語協会編『モンゴル語術語論文集』内モンゴル教育出版社、1991年

モンゴル語文研究会編『モンゴル語文』(1954年7月-1958年12月)

中国語文編集委員会『中国語文』人民教育出版社(1952年2月-1960年12月)

(てぐす／博士後期課程)